

第 8 号

発行日 平成20年3月6日
発行者 〒036-8561 弘前市文京町3
理工学部同樹会(理工学部内)
題 字 同樹会長 千葉 信行
印刷所 柗 笹 軽 印 刷

理工学部同樹会報

同樹会の千葉信行会長が会報に寄稿して欲しいと先日見えた。化学を専攻して来日した人、どの様な業務で長い間仕事を続けているのか紹介する内容でこの事だ。たいした実績もないので、研究生活について書くのは気が引けるのですが、大学の卒業以来続けてきたことを書いて責を果したいと思いません。



会員寄稿

研究生生活を顧みて

寺山 百合子
(昭和四十一年 文理学部理学科卒業)

かつては自分で抗体を入手、必要な試薬がキットとして市販されるようになり、測定そのものはとても楽になりました。前半の二十年は大学で、主として副腎腫瘍や慢性腎不全の患者さんのステロイドホルモン療法の中での研究が中心でした。後半の二十年は鷹揚郷腎研究所に研究を続けております。腎研究は主に血液透析治療を行って行います。

測定値を得るためにかなりの労力を必要としましたが、前述のように血中成分の測定は、X線CTや超音波などによる画像検査や格段に進歩しました。この期間にたくさんの情報を得ることが容易になりました。したがって、何を測定しようかという分析生化学的検査の他に生化学的検査や画像的データを集め、まとめる必要がある。未だ試行錯誤の日々を過ごしております。

卒業生から届いた年賀状に「いいよ、定年を迎えます」と書かれていた。ウーム、理学部を巣立って行った諸君たちの中にも、定年を迎える人がポツポツ現れたのか。「光陰矢の如し」と言うが、四十三年間の弘前大学勤務生活は永かった。私の人生そのものであった。昭和四十年、文理学部理学科を卒業した私の私生活は、弘前大学で、充実した。毎日の理学部・助手に採用された。毎日が学生実験のお手伝いで明け暮れた。勤めて、一〜三年後、学生たちによる大学封鎖が起った。この時代、学生も教官も、大学管理法をめぐって、大いに揺れた。しかし、この頃は、学生とのコミュニケーションも

平成十九年度末をもって、数理科学科 岡崎禎子教授、物理化学科 田尻明男教授、物質創成化学科 南條宏肇教授、地球環境工学科 宮下正夫教授、情報工学科 宮田寛教授の六名退職の先生方が退職されました。は、永年にわたる教育研究活動、及び同樹会に対するご尽力に対

定年退職教員



理工学研究科 (物理科学科) 岡崎 禎子

定年にあたって

豊かであったと記憶している。平成九年十月、時代の要求に押されて、工学系の学科を加えた理工学部が船出した。私の研究も、「磁性」中心から「磁気ひずみ」へと重心を移すことになった。改組に伴い、実験装置も次第に充実するにつれ、学生たちと材料開発が忙しくなった。研究成果を発表するため、学生たちと一緒に、春・秋の学会やボストンで開かれたMRSのMeetingに出かけたことは、思い出の一つになる。

思い出は尽きないが、共に過ぎた先生方、懐かしい卒業生たちの顔が浮かぶ。弘前大学理学部・理工学部出身者として、胸を張って、進んで欲しい。

「学生への思い」

理工学研究科
(地球環境学科)

南條 宏 肇



わたしはこの三月で定年を迎えることになりました。年月の経つのは速いもので、弘前に赴任したのは昭和五十一年の三十三才のときでしたので、もう三十二年になりました。今思えば長かったようでもあり、またあつという間でもあつたように感じ、不思議な感覚です。その間いろいろなことがありましたが、またいろいろな方にも迷

惑をかけたことと思っておりますが、なにはともあれ大過なく仕事を全う出来たのは、皆様の支えがあったのおかげと、心から感謝いたします。

私が赴任したのは二月の寒い時期で、弘前大学の宿舎にはすぐには入れず、西が丘のアパートでの生活から始まりました。当時西が丘の周りには田んぼで、雪のあぜ道を歩いて通いました。三月になると雪解けが始まり、田んぼでは雪が解けると同時に草がしゃんと立ち、あぜ道の横を雪解け水が堰を切ったようにあふれながら流れていくのを見て、大都会から来た私には非常に新鮮なものとして感じられたことを今でも思い出します。

春は冬の厳しい雪国にこそあるんだということを知ったことは、その後の弘前での生き方の基盤を与えてくれたような気がしています。

いざ退職するに当たって、改めて考えてみますと、思い出されるのはやはり研究室で一緒になったとともに研究に悪戦苦闘した学生です。どんな苦しいときも学生と一緒にいれば、すべてが癒されましたし、新しいエネルギーを与えてくれたのも学生でした。私が赴任したころは、学生も裕福ではありませんでしたので、夜になると酒代のスポーツカーとして研究室の学生に両脇を抱えられて拉致されたものでした。都会出身の私には、終電車の概念がないというところがえらく気に入りました。いつも明け方までいろいろなことを議論して過ごしたことを強烈に覚えています。そのころは何月の明け方何時であるかを大体知っていましたし、まあよくあんな短い睡眠時間で次の日授業がやれ

たとか、良くあんなに激しい議論がまじめに出来たものだとか、あのころの自分の若さを恥ずかしくも思いますし、またうらやましくも思ったりもしてきます。大学というのは学生にとっては、社会に出る前の最後の自分というものを見つめる時でもありますし、またもつとも純真にもものを見つめようとする時期でもあると思つていきます。そういう人生にたつてもつと多感で情熱を持った状態の人間と毎年接して議論できるとするのは大接して議論できると考えています。その意味で私が大学という職場で意義のある人生の一ページを過ごせたということに對して、退職の段に当たって、私と付き合ってくれた学生に心から感謝したいと思つています。

そしてそんなにして付き合つた教員に、外で偶然会つたりするのですが、皆驚くほど立派な人物になつていられるのを見ると、たいしたことを教えた訳でもないのにいつも驚かされます。「親は無くても子は育つ」ではないですが、教育というのは決して教えるというだけではなく、持つている自立の精神をすくすくと伸びるようにならなければ、それが教育なのではないかというふうな気がしてきます。

私もこの三月で退職ですが、退職後もあの学生と付き合い合っていたような気持ちを持ち続けているのが今の心境です。



理工部での十年間

理工学研究科
(電子情報工学科)
真下 正 夫



今から一〇年余り前の平成九年一月、理学部の再編によって創設された理工学部に着任し、定年扱いで退職して着任し、平成十二年に理工学部二号館が完成するまでは研究装置は研究室に仮置き状態で研究は東北大学での共同研究に頼らざるを得ませんでした。平成十三年四月には理工学部一期生の卒業研究が始まり、予算をかき集めて装置を新設するのに時間がかかりましたが、このころようやく研究室も立ち上がったように思います。

平成十六年四月に国立大学は法人化され、以降理工学部もいろいろ変化がありました。平成十六年には博士後期課程が設置され、平成十八年には学科再編があつて物質理工学科は三分割され、私は電子情報工学科所属となりました。さらに、平成十九年には大学院理工学研究科所属・理工学部電子情報工学科併任となりました。

国立大学法人も教育、研究、経営の面で次第に大学間格差が大きくなっていくように思われます。その中においてわが理工学部も同じ運命にありますが、課題は緊急を要しますが、大学ごとに置かれた状況はまちまちで

批判的に 学びを 取り組む

理工学研究科
(知能機械工学科)
宮田 寛



同樹会の会員の皆様にはご健勝のことと思います。

私は一九九九年に理工学部知能機械システム工学科が新設されたときに、民間企業から弘前大学に赴任しました。九年前という短い期間でしたが、学科の立ち上げや大学法人化の波に揺れた変化に富んだ時期に立ち会え、充実した時間を送らせて頂きました。

これまで約一〇年間で転勤などで仕事を変わる機会がありました。ずつと研究という仕

くべき問題は共通であつても境界条件が異なりますので当事者が解かない限り正解は得られません。すなわち、他大学は参考にはなつても手本にはならないことが重要な点であると思つています。

発展のためには変革は必要です。ひるがえつて最近の理工学部の種々の変化や試みはどうであつたでしょうか。個人的見解は差し控えますが大局的見地から検証することは将来のためには良いことではないでしょうか。さらなる理工学部の発展を祈り、同樹会会員の皆様のご活躍をお祈りいたします。

事を続けていくことができた。研究(設計・開発なども)の動機は、誰もが「当り前」と考える知識や習慣を体系的に整理した上で抽出される」と「考え方や方法論の枠組み」とでもいえるべきものに對する疑問や変革の意欲に端を発するものではないかと、私は「不可能」や「困難」と思われている事柄に對して、「本當だろうか」、「何とかならないか」といった意識から開始されるものと思います。

研究(仕事)というものは辛く、苦しんだ結果として成果が得られたときに初めて喜びや楽しみを感じることが多いという考え方と、プロセスが楽しくなくて方と、プロセスが楽しくなくては研究(仕事)などやっていられないという考え方があり、す。どちらも真実と思いますが、この境地を自覚するにはそれなりと、インターネットなどが無い時代には一つのことに真剣に向かい合うことが求められたが、今は選択肢が多い分諦めも早く、なかなかこの境地に到達できないのではないかと懸念しています。

関東地区からお越し願った非常勤講師の方々とは異口同音に、「都会の学生と比べて、弘前大学の学生はおとなしく真面目で、行儀正しく静かに受講してくるので素晴らしい」とのお褒めの言葉を頂きます。しかし、論語にあるように「学而不思則罔、思而不学則殆」(学ぶだけで考えなければ何も分らない)です。学んだことを自分の血や肉とするプロセスを大切にしたい、日頃から何を大切にするか、何を大事にするか、何を欲し、何を願っています。学は最高級の遊びであり、生涯に亘り終わることのない旅

す。私も自分にしかできない出会いや体験を通して、何かを学んで行きたいと考えています。同樹会の今後の発展と会員の皆様の益々のご活躍を祈っております。

ものづくりの現場とひと・かね・もの

理工学研究科 (物質創成化学科)
田尻 明 男

平成十三年年度の理工学研究科修士課程設置以来、「地域産業構造情報特論」を担当して来ました。当時は産学連携の仕事をしていたこともあり、地域産業を振興し地域を活性化させるためにも卒業生・修了生を地元に残したいと考えた結果でした。

青森県は周知の如く県民の所得は最低であり、有効求人倍率も最低、さらに短命県、高齢社会到来第1位、と気の滅入る事柄ばかりを取り沙汰される地域です。最低所得そのこと自体嫌な響きを持っており、かて、かてに加えて平均的賃金の確保は超過労働による、というおまけ付きであることが事態をさらに悪くしています。地域を見るに確かに誘致企業としての工場はあるものの、それらは大方が生産の現場であって中央の指示に従っている製品生産・品質管理の時代、各地の工場も独立を



求められてはいるものの、それに必要な要員・開発費・施設を確保しているわけではなく、独自の製品開発は未だ遠い先の話です。ましてや、現場には零細企業がほとんどでそれらに自力で研究開発を求めることは無謀というに等しい状況です。

共同研究にしても本来は企業からの研究協力要員と大学の研究者が対等に開発に携わるべきが、会社の人材をそのことに割くことは出来ないので、研究費の納入のみで後はお任せと言った、言わばオンブにダッコが多いように見受けられます。これは共同研究費は体のいい奨学金交付金と同じです。各省庁の提案公募型プロジェクトに採択された大学や公設試験などのスタッフで自らは直接開発作業には加われない、と言ったケースが企業に目立ちます。何も出来ないという意味では、その中でデザイナー・経営者自ら人間も全く同じです。経営者自ら他にする仕事も沢山あり無理だとする仕事も、その分野の技術者ではないケースが多く、出身も経営や経済・法律だったりしてはもう何がどうしたことを考えると、もうはりまず人材だと思えます。良く、「ひと・かね・もの」と言われませんが、この順番は語呂が重要です。この順だと思いません。このスタッフが気軽に大学の恩恵を訪ねて相談をする、距離的に近い等、のことも必要です。私は講義の中で、青森県の産業構造の特微やものづくりの現状と展望を説明し、諸君がこの地域に個性を注ぎ、製品を一個生産し、個

同期会報告

四十二年としての
第一回同期会

同期会副会長
三浦 賢 治

売っていくから、の収入を得て物心両面の豊かさを築く基礎となれ、と教えて来ましたが、幸い私は平成十八年度までの期間施行された「青森県産業科学技術振興指針」の作成に関わったことでもあって、当時は熱くこの思いを抱いておりました。また、実際に卒業生・修了生には地元のかまも地場企業への就職を働きかけました。後一〇年も経って、元気に地場企業が幾つか残り、そこに卒業生や修了生がいてくれたら、いいなと思います。

当時の学科は文理学部理学科。昭和四十年三月の物理学専攻の同期卒業生は十六名でした。みなそれぞれ道を進み、ふと気がつく、大半は定年退職をし、第二、第三の生き方をしていることになりました。

大学に残った紅一点の田村禎子さん(岡崎教授)と現在は大大学院保健学研究科教授の岩崎晃さんとたまに会って、みなさんどうしてるかと同期会を呼びかけることになりました。青年時代に還った気分を味わおうかと敢えて「子どもの日」に会を付いた案内九名だけの旅行が、孫との約束あり、療養中、など、の二人に今も似非科学との対決に熱く、科学教育に取り組み野呂茂樹さんと私の四人にゲスト一人。そのゲストは化学専攻の千葉同樹会会長。

ときは平成十九年五月五日。

場所弘前市土手町の某所。五人だけでもまあ、最近話題の青報交換から、気炎をあげたので？春までの時を遡ったのでした。我々が卒業する頃の日本は経済成長時代で、向かうところは激しい求人攻勢。でも向かったのは二人だけ。進学が三人。そしてなんでも含め九名は高校の物理教員。道を選んだのは高校の物理教員。高教員増期で教育委員会は教員確保に必死。割と地元に残り、研究会等で顔を合わせてもいたのでは、お互い同期仲間のか、知れませんが、でも、越えて懐かしさもほろ苦さも甦ってくる。懐かしさもほろ苦さも甦ってくる。個人的な記述になります。懐かしい話を少し。

(その一) 手回し計算機
四年のとき、新型電子計算機(その一)が聞かされたことがあり、そのとき、教官の方々は、データ処理に一生懸命手回し計算機を回していた時代です。二進法を勉強なんかも始めた頃でした。今やパソコンは並の用具。ラックボディの殆どは並の用具。(その二) 岩木山登山
なぜか仲の良かった物理仲間、岩木山登山をしたり、実験の合間に研究室の窓から抜けてグラウンドでソフトボールをしたり、そのとき、目を新渥地震：：：。面が波打つた。新渥は清水、鈴木、宮沢、山本、橋本、明石、佐藤、渡邊の各先生から紹介状や激励をいただいた。方から岩崎さんを会社訪問。仕掛は岩崎さんで、今回同期会にムを手振り、今回同期会にムを持参した次第です。(その三) エントロピー

私が物理学を学んで一番ショックだったのはエントロピー増大の原理。エネルギー保存はあるがたいけれど質は劣化、エネルギーの流れは必ず終焉する。というのですから……。最近、分野はズレるのかもしれませんが、シントロピーという新語がある。そこで、人間が働くことも含めて生物がエントロピー増大とは逆の営みをしているという説に少し癒やされています。でも、地球の温暖化、石油資源の枯渇等が目にちらつき、さらなる科学技術の進展が問われていること。変わりはありません。

脱線しました。母校で研究促進・後輩の教育に勤めてきた二人の同期も転機になります。

同樹会の後輩は勿論、次代を切開く若い人たちにエールを送りたい世代の我々であり、もつと仲間を増やして近いうちに二回目を開こうと散会したのでした。

末筆ながら千葉会長にはお付き合ひありがとうございました。



四十二年しての第一回同期会



本瀬先生と高橋先生 お二人の退官を祝う会



去る二〇〇七年十一月二十三日(金)、ホテルニューキャッスル曙の間にて「本瀬先生・高橋先生の退官を祝う会」を開催いたしました。出席者は六十六名、記念品参加を含むと二百二十五名の参加でした。出席者の大部分は、文理学部、理学部、工学部の三学部卒業生で、両先生を囲みながら、そして懐かしい先生方、青春時代を過ごした仲間たちと楽しい一時を過ごす貴重な時間となりました。途中、学生時代の思い出を交えた楽しいスピーチや、現在、アフリカのウガンダで、算数・数学の教員として活躍している卒業生の報告があり、大盛況の内に、会を終了しました。

同樹会幹事
松野 徹也



理工学部と理工学研究科の就職状況

理工学部
就職対策委員長
田尻 明男

昨年に引き続き理工系の卒業生・修了生を取り巻く就職活動環境は、全体的には極めて活発で、求人企業数は昨年を大きく上回る状況です。学生側の就職活動と言うよりはむしろ、機械・電子・電気・情報を中心とした企業側の求人活動が目立つような状況で、所謂売り手市場がなお継続しています。しかし、残念ながら域内企業の求人活動は相対的に押され気味です。

理工学部全体の就職率は平成十八年度(平成一九年三月卒業)の実績が九六・五%(昨年度比〇・一%増)となり、これまでにない高い就職率を示しております。このうち、青森県内企業等への就職率は二一・八%で、昨年度に比べ一・二%減となりました。学科ごとの就職率は、数理システム科学科九二・六%、物質理工学九二・七%、地球環境学一〇〇%、電子情報システム工一〇〇%、知能機械システム工九七・〇%でした。各学科別の就職状況の詳細はグラフをご覧ください。

大学院理工学研究科への進学率は理工学部全体として三五・一%で、特に次の三学科はそれぞれ、物質理工学四一・七%、地球環境学三九・六%、知能機械システム工四二・九%

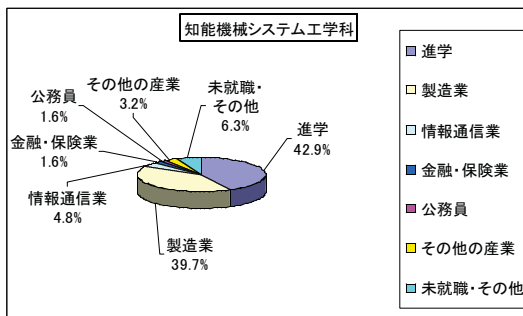
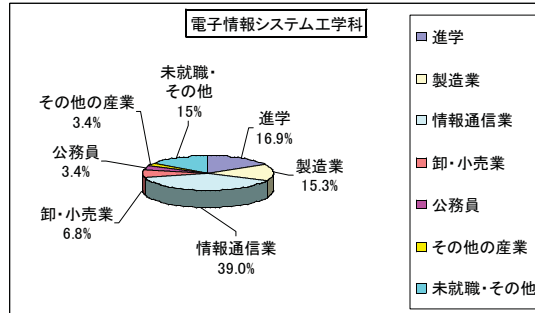
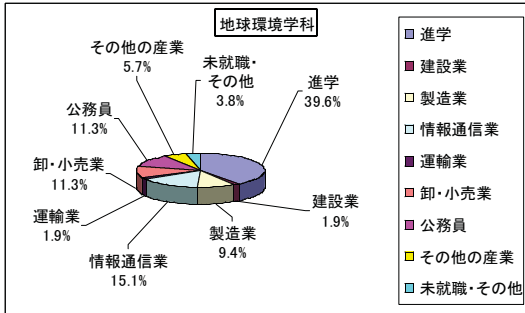
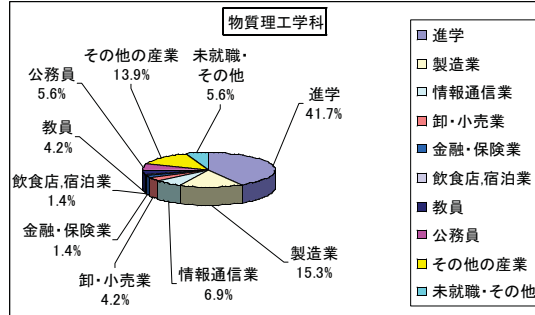
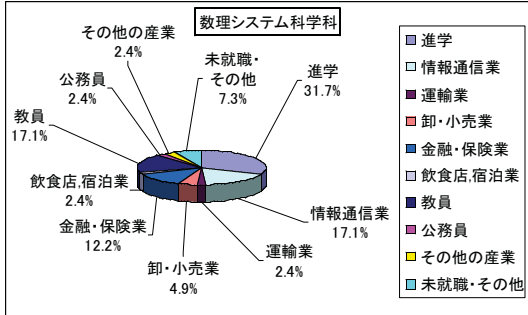
と依然高い進学率を示しています。各学科別の進学先については、進学先一覧をご覧ください。

研究科修了後の就職率は、平成十八年度の実績は昨年度同様一〇〇%でした。青森県内への就職率は一一・九%で、昨年度と比べてこちらも二・八%減となりました。各専攻別の就職状況の詳細はグラフをご覧ください。

この会報が発行される直前に、毎年、弘前大学学生就職支援センターの最大の事業である合同企業説明会が開催されます。これは翌年度就職活動をする学生諸君を対象にした、大学の就職支援活動であり、学生諸君は以降の就職活動のために各企業のブースを訪ねて情報を得ることになります。今年度は二月十八日(火)・十九日(水)の二日間市内の会場で開催されました。このイベントへの参加を希望する企業は大変に多く、今回から参加が有料化されたにも関わらず、本学の学生諸君に自社の宣伝をする絶好の機会でもあり、是非にと申し込まれるのですが、日程と場所に制限があるため、全ての企業を受け入れる状況にはなっておりません。ブースを開設する企業間には理工系・文系の特に甚だしい偏りはないものの、理工学部あるいは教員との関係から、参加して欲しいような企業もあるかと考えられます。今後、参加企業の選抜などについて学部側の意見も反映されれば、と思っております。



平成十八年度
理工学部
就職状況
分野別グラフ



進学先一覧
(理工学部卒業生)

数理システム科学科

弘前大学大学院 七名
その他、北海道大学大学院、
東北大学大学院、早稲田大
学大学院

物質理工学科

弘前大学大学院 二五名
その他、東北大学大学院、
筑波大学大学院、静岡大学
大学院、信州大学大学院

地球環境学科

弘前大学大学院 一六名
その他、北海道大学大学院、
東北大学大学院、筑波大学
大学院、東京学芸大学大
学

電子情報システム工学科

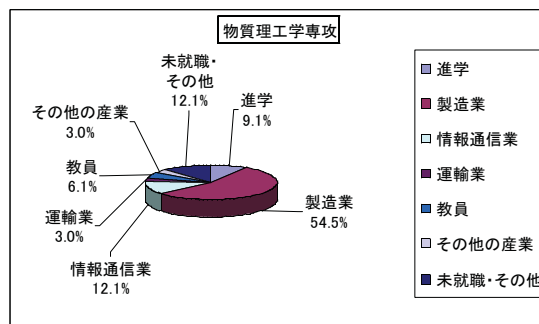
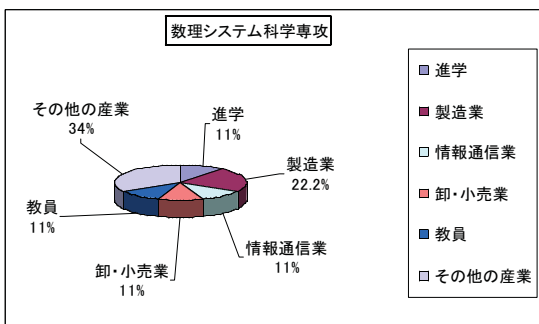
弘前大学大学院 六名
その他、北海道大学大学院、
東北大学大学院、電気通信
大学大学院、神戸大学大
学

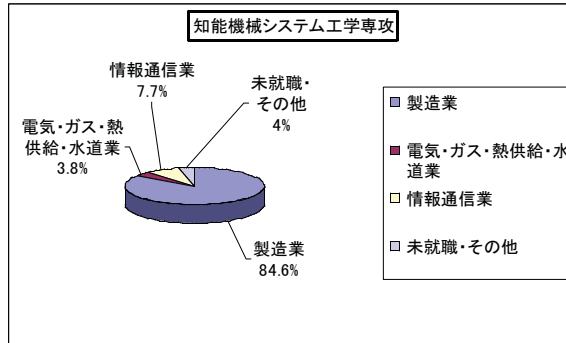
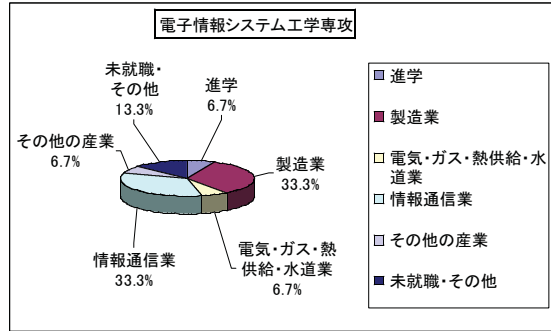
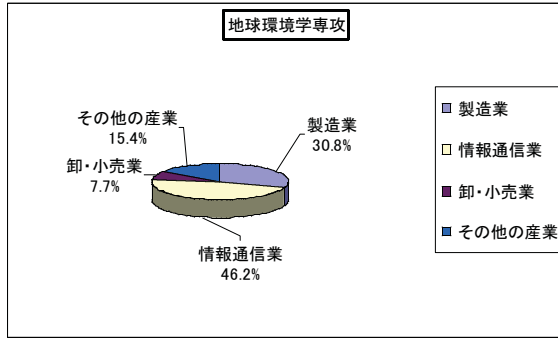
知能機械システム工学科

弘前大学大学院 二五名
その他、東北大学大学院、
京都工芸繊維大学大学院



平成十八年度
理工学研究科
就職状況
分野別グラフ





平成十八年度
工学部卒業・工学研究科修了
祝賀会



物質理工学科

去る平成十九年三月二十三日、例年通り大学会館三階大広間にて、工学部卒業・工学研究科修了祝賀会が開催されました。ここ数年、祝賀会への参加率が気になっておりましたが、今年度は昨年より若干ながらも上回る参加率となり、運営は昨年者として少しばかり安心していただいております。しかしながら、更なる向上を目指していきたく思っております。また、参加率だけでなく内容においても、ご退職の先生方を始め、各学科長や学生からユーモアと感慨溢れる沢山のスピーチを頂戴し、昨年度以上の盛会と言えるところではないかと感じております。最後にありがとうございました。祝賀会準備及び開催にご協力いただいた工学部教職員関係各位に感謝申し上げます。



知能機械システム工学科



地球環境学科



電子情報システム工学科



数理システム科学科

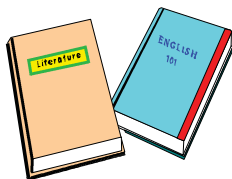
平成18年度 弘前大学理工学部同樹会収支決算書 平成19年3月31日現在

◎収入の部

項目	金額	摘要
前年度繰越金	円 7,540,636	
会費	943,000	正会員 94人 学部 1年 26人 260,000円 " 1年(19年度入学) 44人 440,000円 " 2年 0人 0円 " 3年 0人 0円 " 4年(祝賀会時納入3人分含む) 18人 180,000円 3年次編入生(18年度入学) 2人 20,000円 " (19年度入学) 1人 10,000円 院生 1年 3人 30,000円 " 2年 0人 0円 特別会員 1人 3,000円
卒業・終了祝賀会当日会費納入分	168,000	学生 24人 60,000円 教員等 43人 108,000円
預金利息	267	
計	8,651,903	

◎支出の部

項目	金額	摘要
弘前大学窓会費	円 240,000	9月22日払込み
同樹会報作成費	258,825	会報第6号PDF交換データ (5,250円) 会報第7号 2,100部 (253,575円)
卒業・修了祝賀会	434,160	卒業・修了祝賀会経費 (262,160円) 卒業・修了祝賀当日会費 (168,000円) 卒業・修了祝賀会退職教員贈呈用花束 (4,000円)
写真代	97,650	卒業・修了祝賀会写真代 (97,650円)
通信費	20,175	加入案内送料(研究科新入生) (2,205円) 未加入者へ加入案内送料(学部4年) (14,900円) 卒業・修了祝賀会写真送料他 (3,070円)
会議費	0	
事務費	120,000	名簿整理及び会費払込案内ほか事務処理謝金
消耗品費	45,012	封筒, 払込取扱票 (36,750円) ワープロラベル用紙, P C用紙他 (8,262円)
郵便振替払込料	9,000	会費払込手数料 (92人)
予備費	7,427,081	次年度以降経費引当金を含む
計	8,651,903	



平成19年度 弘前大学工学部同樹会収支予算書

平成19年4月1日現在

◎収入の部

項目	金額	摘要
前年度繰越 収支差額	円 7,427,081	
会費	3,600,000	正会員 360人×@10,000円 学部 1年 310人 2年 15人 3年 15人 4年 20人
計	11,027,081	

◎支出の部

項目	金額	摘要
弘前大学 同窓会費	円 240,000	
同樹会報 作成費	250,000	2,000部×@125円
卒業・修了 祝賀会	250,000	100人×@2,500円
写真代	100,000	卒業・修了者祝賀会記念写真 190人×@525円
通信費	30,000	加入案内送料(研究科新入生) 50人×@90円 加入案内送料(学部学生4年) 250人×@80円 卒業・修了者祝賀会記念写真送料他(5,500円)
会議費	10,000	
事務費	120,000	名簿整理及び会費払込案内ほか 事務処理謝金
消耗品費	20,000	ワープロラベル用紙, PPC用紙他
郵便振替 払込料	10,000	会費払込手数料 100人×@100円
予備費	9,997,081	次年度以降経費引当金を含む
計	11,027,081	



平成十七年度より幹事(会計担当)を努めております。一線です。理工学部同樹会は平成十二年に発足し、まもなく九年目を迎えるとしております。一見すると同窓会としては歴史が浅いように思われるかも知れませんが、理工学部同樹会は、従前の文理学部理学科・理学部・理学研究科の同窓会と新設された理工学部に対する同窓会を束ねる形で発足しており、弘前大学創立と同じ歴史を重ねております。様々な皆様のご尽力の積み重ねによって、本会がその長い年月を辿っていることを考えますと、幹事としての重責に対する自らの微力を、我ながら心許なく感じるばかりです。さて同樹会発足の時へと時間を遡ってみますと、その前年は弘前大学創立五十周年を迎えた年でありました。それから光陰矢の如し、平成二十一年には弘前大学創立六十周年を迎えます。言わば、弘前大学が還暦を迎えるにあたり、還暦祝いの行事等の計画が進んでおり、本会としても協力して参る所存です。会員各位におかれましては、弘前大学の歴史の中にいたご自身を振り返り、折りに触れてご意見、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に様々な面にてご協力頂きました、理工学研究科事務長始め事務職員の方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。次第です。

編集後記

事務局

弘前大学大学院理工学研究科 一條 健 司
住所：〒036-8561
弘前市文京町三
電話：0172-39-3660
E-mail: ken@eit.hirosaki-u.ac.jp
URL: <http://www.st.hirosaki-u.ac.jp/~doju/>



監査	須藤 弘	幹事	荒木 宏	副会長	一條 健	田中 徹	三浦 克	千葉 賢	松野 信
----	------	----	------	-----	------	------	------	------	------

役員一覧